

を請ける様なことであつた、故に近藤勇と説があはぬから、近藤は京都へ同志を引率して去つたのである、清川八郎は同志と共に横浜居留外人を残らず襲撃して、夫から幕府へ対して不<sub>ニ</sub>容易<sub>一</sub>企てある趣であるが、これを頭に命令して所置することは出来ぬ、なぜなら頭が先生と尊称してゐる位の人だからつまり清川の門人の手下の如くだから、時の御老中もなんと手つけかたがないから、頭のうちに清川にも恐れず、可なり議論もある者一人に秘密に命じて、清川を打果せしむることになつた、其頭の門人に剣術体術ともにすぐれた人を五人選抜して、清川八郎の有馬の藩邸へ行ところを、麻布一の橋の前で切殺した、五人のうち手を下したのは、佐々木只三郎と云ふ元会津藩であつた人だ、「戊辰の役、淀にて討死」其外の四名の人の名も知つてゐるし、頭の名も知つてゐるが用のなきことだからはなしません、

左の人名は本文に揚ぐべからず、  
御老中は、小笠原吉成守、当時図書頭と云ふ、  
頭は、松平上野介、前主税之助と云ふ、  
高橋伊予守、精一郎と云ふ、

山岡鉄太郎、

内命を受けたる頭は、窪田治部右衛門、  
刺客は、佐々木只三郎、永峰良三郎（後ち弥吉）

高久左次馬等にてあと二人は記憶せず、  
さア本所の屋敷にいる浪士の沸騰甚しく、頭さへ大騒ぎであつたが、頭は内命を請た人も残らず頭でありながら取縮出来兼ねは不都合と云ふので、其三日目に御役御免となつた、浪士即ち新選組は酒井左衛門尉へ御預けとなつて、まづことが済んだ、清川八郎と云ふものは中々豪傑であつたらしひです、近藤勇は京都に行き色々のこともあつたるが、松平肥後守（会津）へ御預かりとなつて壬生寺にゐて、新選組と名づけて、市中では壬生浪士と云つてゐた、会津の手につけてから中々功勞があつて、探索から何から一切引受けて、はじめの御上洛に足利代代の木像の首をとりて、四条河原へ梟首して、幕府に対してあてつけをやつた者があつた、其者を捕縛したのも近藤勇の新選組であつた、兎が捕縛した者を斬首にすべきを、長州より幕府に対しては失敬かしれぬが、天朝へ対しては忠勇の者共であるから、死を宥免されることを

村垣記

請願したので悉く救けられた、夫から長州の天朝に対して忠義と云ふのと、粗暴なる脱藩士浪士の人望を得た、夫からして長州とは余程不快を生じ、常に敵視するに至つた、長州人入京御停めになつてから会津の手で捕縛したのは、凡そ新選組の働きである、屢々彼の木戸さん杯は危き目にあつたさふだ、其恨もあつたからだるふが、戊辰の春、大坂より帰東して上野御謹慎中、僅かでも御警衛をしてゐたが、其御警衛を御免になつてから、甲州へ脱走して第一に官軍へ抗抵して衆寡敵せず、終に敗走して、近藤勇は中仙道で潜伏したを生捕れて、板橋駅で斬首せられて、これを京都に送りて梟首せられたが、其首を盗んだ者があつたさふだ、今板橋の停車場の脇の畑中に墓が出来て居るが、中々の人物であつた、老爺なども度々話をしたこともあつたが、更に浪人臭味などはなくて、万事信切で、能く事柄を考へて、粗暴のことは毫もなかつた、誠に惜しむべき豪傑だつた、其副頭で土方歳三と云ふものがあつたが、是も人才で、此人は箱館で愈々降伏といふ時に行衛知れずとなつたさふです、夫より惜しき人は小栗上野介と云つた人では、三河以来の

旗下で、瓦解前より御勘定奉行を勤役して、あの貧乏の末年幕府をして横須賀に製鉄所を設け（今の横須賀軍港鎮守府です）、ドツクを拵へ、兎に角軍艦をこしらひる処を設けたです、兎が戊辰の二月中に小栗は頻りと戦論中、御謹慎を承服しない処から御役御免となつて、采地へ家族を連れて引込んだです、すると四月頃其采地近辺へ官軍が脱走兵を追て出かけたが、小栗が采地に居ると云ふことを聞いて、人数をして其居宅を取囲んで父子を縛し、単に不埒とか何んとか云ひ渡して斬首して仕舞つた、いかに戦論だろふが討論だらふが、二千石三千石の者彦人でも何をやるものか、夫を無酷に捕縛して、父子とも斬首するとはなんたることだらう、後で聞とそのことをやつた藩は彦根だと云ふ事だ、其頃四十四五でもあつたら、今迄いにはながいきの人でなければいぬけれども、維新の際には玉石更にわからず、幕府の者と云ふと無茶苦茶にやつたです、夫も今迄味方だと思つた尾州彦根其外立派な御譜代大名の藩、即ち官軍が薩長等へ赤心を顯す為めだとか、なんとか云つて誤候にやつたのだからたまらないです、